

平成22年 5月31日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005～2009

課題番号：17083021

研究課題名（和文） 東アジア海域における黒潮圏交流の総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive Study of the Cross-Cultural Exchange in the Black Stream Current Area in the East Asian Maritime Region

研究代表者

津野 倫明 (TSUNO TOMOAKI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：60335916

研究成果の概要（和文）：本研究は、16世紀から19世紀にかけての黒潮圏（日本と東アジア諸地域）における海域交流の実像を明らかにし、寧波―博多を中心とする東シナ海における海域交流と比較的に検討することを目的とした。「地域史料」の調査および黒潮圏における現地調査の結果として、前近代においては黒潮は畏怖の対象だったのであり、この黒潮の存在が前近代の航路を大きく規定していたとする仮説を提示した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to reveal the actual conditions of the cross-cultural exchange in the Black Stream Current area (between Japan and other nations in East Asia) from the 16th to the 19th centuries, and to compare the results with the cross-cultural exchange in the East China Sea region while focusing on the Ningbo-Hakata relationship from the standpoint of comparative history. As a result of research on “regional historical materials” and field research on the Black Stream Current area, we found the Black Stream Current to be the object of fear, and presented one hypothesis that the Black Stream Current influenced the sea routes in the period before the modern ages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	5,800,000	0	5,800,000
2006年度	5,600,000	0	5,600,000
2007年度	5,800,000	0	5,800,000
2008年度	5,800,000	0	5,800,000
2009年度	5,600,000	0	5,600,000
総計	28,600,000	0	28,600,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：日本史、東洋史、黒潮、地域史料、東アジア海域、海流の認知、国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 黒潮の流れに沿う南海路は東アジア海域交流のルートの一つとみなされてきたが、その実態あるいは歴史的変遷は十分に検討

されてこなかった。

(2) 当該特定領域研究には東アジア海域交流のメインルートにあたる寧波―博多関係をはじめ日中間交流に関する研究班が形成さ

れる予定であった。周縁に位置する黒潮圏を対象とする本研究班は比較史的な検討により、東アジア海域交流の進展・深化に貢献しようと考えた。

2. 研究の目的

(1) 16世紀から19世紀を中心に黒潮圏における日本と東アジア諸地域(中国・朝鮮・琉球・台湾)との交流をその媒体としての黒潮に注目して、日中双方の「地域史料」を日本史・中国史の研究者が調査・分析することで、東アジア海域交流の周縁部における地域間交流の実像を明らかにする。

(2) 東アジア海域交流の周縁部における地域間交流と東シナ海域交流とくに寧波―博多を中心とする日中間交流と比較的に検討する。

3. 研究の方法

(1) 役割分担にしたがった、日中双方の「地域史料」の分析。()内は研究の進展によって追加されたもの。津野：南海路および土佐水軍に関する史料。荻：漂着船および漂着地に関する史料(近代の珊瑚漁に関する史料)。吉尾：古地図および地方志に関する史料。荒武：移住など台湾と四国との人的交流に関する史料。

(2) 分枝流も含む黒潮の存在を念頭においた現地調査(この機会に研究報告を含む班研究会も開催)。原則として班員全員参加の現地調査を各年度2回ずつ実施してきた。主要な調査地：①高知県下田浦・山路城跡、②台湾花蓮日本人移民村、③沖縄県与那国島日本最西端、④台湾澎湖諸島、⑤中華人民共和国福建南部の沿岸部、⑥鹿児島県トカラ列島周辺海域・坊津、⑦佐賀県名護屋城・長崎県の平戸・五島列島、⑧大韓民国安骨浦・熊川・蔚山・西生浦の倭城跡、乃而浦、⑨中華人民共和国浙江省市舶司跡・舟山列島。

こうした現地調査の実績が認められ、研究計画4年目には当初所属していた文化交流研究部門から現地調査研究部門に配属された。

4. 研究成果

後掲の「5. 主な発表論文等」に掲載した論考・発表に言及しつつ、5年間の研究成果について述べてゆく。

(1) 黒潮はむしろ交流の阻害要因とみるべきではないかといった観点を班員それぞれは漠然と有していたが、これに史料的裏付けを与えたのが〔雑誌論文〕⑧⑩の吉尾論考である。これらは16～19世紀の漢籍に記された台湾東方の「万水朝東」および赤尾嶼・姑米山間の「溝」(「黒溝」「黒水溝」)が黒潮本流であり、両者を危険視するイメージが定着していたことを明らかにした。黒潮は船舶の漂流・漂着に大きな影響を与えたのであり、例

えば黒潮本流が接近する土佐には近世にしばしば異国船が漂着した。〔雑誌論文〕の荻論考では漂着船の多くが琉球船と「唐船」であり、これらのうちには黒潮本流に乗ってしまつて漂流し、幸い黒潮分流のおかげで足摺岬近辺あるいは室戸岬近辺に漂着した事例もあると指摘されている。さらに、こうした漂着船に対する土佐藩の対応などの具体的な検討を通して黒潮圏に属する土佐の地域性が明らかにされている。これらの論考で提示された成果に加え、現地調査でえられた聞き取りによる情報や体験も班としての共通認識が形成されるうえで重要であった。例えば、トカラ列島周辺を流れる黒潮―つまり、19世紀半ばにおいても薩摩・琉球間を往来する人々がもっとも恐れていた危険海域である「七島灘」―を横断した前記の現地調査⑥では悪天候が重なったこともあるが、黒潮の恐ろしさをまさに実感した(〔雑誌論文〕③の津野論考参照)。こうして、本研究班では前近代の人々には黒潮に対する「畏怖」が存在したとみる共通認識が生まれたのである。(2) 津野が分担した「南海路」に関する史料の収集では、16世紀後半に島津義久が長宗我部元親に大名管理下の廻船往来を提案していた事実を示す史料的所見がえられた(〔図書〕①所収の津野論考参照)。この提案は長宗我部領と島津領との間を廻船が往来していたこと―いわば民間レベルの交流があったこと―を前提としており、この時期にも「南海路」が交易ルートとして機能していたのは確かである。しかしながら、「南海路」に関する新出史料にはさほど恵まれなかった。それは、寧波―博多間の「大洋路」とその延長上にある日本国内の「中国海路」が日中間および日本国内の海域交流の大動脈にあたるのに対して、「南海路」は「大洋路」に接続してはいるものの、「中国海路」の補助的な存在にすぎなかったからであろう。「南島路」が中世の日中交流において「大洋路」のバイパスとして機能していたとする指摘があり(橋本雄「中世の国際交易と博多」〈佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』2007年、山川出版社)、こうした関係は「南海路」と「中国海路」にも認められよう。「南島路」と「南海路」がメインルートとなりえない要因としては移動に要する日数など様々な問題点をあげることができようが、黒潮の存在を考慮すべきであろう。琉球を経由する「南島路」の場合は2度も黒潮を横切らねばならず、「南海路」も黒潮が接近する沿岸を航行せねばならない。仮説の域を出ないものの、黒潮に対する「畏怖」を前提とするならば、黒潮の存在が前近代の航路を大きく規定していたと想定されよう―このことが「南海路」を経由する交流を示す史料が僅少である理由と考えられる一。この

仮説の提示は黒潮に注目した本研究の成果の1つといえよう。

実際、「南海路」の伝統を背景にして土佐では中世から造船が盛んであったと指摘されているものの、〔雑誌論文〕⑤の津野論考が指摘するように「造船地帯」と評すべき地域となったのは豊臣秀吉による朝鮮出兵の終盤であった。この土佐の造船の隆盛は刹那的であり、こうした状況もまた「南海路」がメインルートではなかったことを示している。

(3) 黒潮を危険視するイメージが定着していたことを明らかにした〔雑誌論文〕⑧⑨の吉尾論考は一方で、「近代の日本は、台湾の東方を流れる黒潮について、水産資源の宝庫という新たな価値」を与えたと指摘している。これを機に黒潮に対するイメージが変わったためであろう、近代においては黒潮を積極的に「乗り越える」という現象がみられるようになる。こうした現象を、〔雑誌論文〕⑬の荒武論考・〔図書〕③の荻論考はそれぞれ台湾移民や珊瑚漁の視角から具体的に分析している。前者では徳島県の漁民が「黒潮の海」を目指す南行よりも瀬戸内から玄界灘さらに朝鮮近海へと進出する北行を選好する傾向を指摘しており、ここからは海を生計の場とする漁民の黒潮に対する畏怖が依然として看取される。しかし、一方で徳島県の農民たちは台湾に移住して吉野村などの移民村を形成し、定住した。こうした移民はやはり安定した航路の開拓があってこそ可能だったわけで、それは日本から台湾に安全に渡ること、つまり黒潮を「乗り越える」ことにほかならない。荒武はこの移民関係の総督府文書を整理した目録（〔図書〕①所収）も作成しており、これは移民研究のさらなる進展に資する重要なデータである。後者では東アジア海域の黒潮圏で展開した珊瑚漁の歴史が概説的に論じられており、「内地」からの漁船が台湾にも押し寄せた事例が象徴するように珊瑚を目指す漁民や仲買人—多くは高知県出身者—の移動など漁民・商人の世界にも黒潮を「乗り越える」時代が到来したことを示す事実が随所で指摘されている。このような人々の移動が観察されることからすると、黒潮圏における日本と東アジア諸地域との交流は近代以降にはまったく様相を変えてゆくと考えられるのである。かかる現象は知識・技術などのいわゆる近代化—例えば、〔図書〕③の荻論考では珊瑚漁で使用する漁船の帆船から機動機付船への転換が指摘されている—により黒潮に対する「畏怖」が払拭されたことに因るとみるべきであろう。

(4) 本研究班からは、特定領域研究内の重点項目の1つ〔〈東アジア海域〉の理論化〕を推進する東アジア海域史研究会に津野・吉尾が参加してきた。その研究会における口頭報

告の一部をもとに発表したのが〔学会発表〕③の津野報告・〔雑誌論文〕⑥の津野論考である。朝鮮出兵の原因・目的に関する学説を整理しつつ東アジア海域における秩序に言及しており、特定領域研究なればこそ重視されるべき共同研究に参加した成果として付言しておく次第である。

(5) 上述の成果は、日本国内はもとより東アジアの各国・地域でも発表されている。中華人民共和国：〔学会発表〕②⑦。大韓民国：〔雑誌論文〕⑥、〔学会発表〕③。台湾：〔雑誌論文〕⑧⑨⑩、〔学会発表〕⑥。とくに黒潮に対する認知や自然環境としての黒潮に関する吉尾の研究成果は中国語訳が出されているように、国際的にも高い評価を得ている。

(6) 黒潮は畏怖の対象だったのであり、この黒潮の存在が前近代の航路を大きく規定していたとする仮説を提示した。しかし、黒潮を「乗り越える」航路が機能していたのも事実であり、その要因の解明は今後の重要な研究課題である。また、積極的に「乗り越える」現象といわゆる近代化（技術・政治・経済など諸側面）との関係の解明もまた今後の重要な研究課題である。〔図書〕③および前述の東アジア海域史研究会が2010年発行を予定している共著、これらの英訳が企画されている。こうした状況からすると、東アジアのみならず、欧米も含めた国際的共同のもとで黒潮圏に関する学際的研究の展開が展望される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計21件）

- ① 吉尾寛、「Environment of Oceans in the History of the East Asian Seas」、『黒潮圏科学Kuroshio Science』、第3巻、2010年、査読無、印刷中
- ② 荒武達朗、「内地農民と台湾東部移民村：『台湾総督府文書』の分析」、『東アジア海域交流史 現地調査研究～地域・環境・心性～』、第4号、2010年、査読有、137～163頁
- ③ 津野倫明、「黒潮班 現地調査報告」、『東アジア海域交流史 現地調査研究～地域・環境・心性～』、第4号、2010年、査読無、35～42頁
- ④ 和田洋佳・荒武達朗、「翻刻と紹介：台湾総督府殖産局『台湾官営移住案内』1914年」、『人間社会文化研究（徳島大学総合科学部）』、第17巻、2009年、査読無、1～30頁
- ⑤ 津野倫明、「朝鮮出兵期における造船に関する一試論」、『戦国史研究』第58号、2009年、査読有、1～11頁

- ⑥ 津野倫明、「壬辰倭乱の原因・目的に関する日本の諸学説」、『日本学』（東国大学校日本学研究所）、第28輯、2009年、査読有、39～54頁
- ⑦ 吉尾寛、「隆慶和議に関する近年の日本の分析視点」、『研究論集』（河合文化教育研究所）、第6集、2009年、査読無、97～109頁
- ⑧ 吉尾寛（顧雅文訳）、「台湾海流考—漢籍文獻中記述的台湾周邊海流與黒潮遭遇（経験）—」、『白沙歴史地理學報』（國立彰化師範大學歴史學研究所）、第6期、2008年、査読無、163～198頁
- ⑨ 津野倫明（劉渌軍訳）、「土佐（高知）の史書及自治体史之編纂」、『方志学理論与戦後方志編修実務国際学術研討会論文集』（国史館台湾文獻館）、2008年、査読無、267～275頁
- ⑩ 津野倫明、「土佐（高知）における史書および自治体史の編纂」、『方志学理論与戦後方志編修実務国際学術研討会論文集』（国史館台湾文獻館）、2008年、査読無、252～266頁
- ⑪ 荻慎一郎、「金毘羅船の船旅」、『地方史研究』、57巻5号、2007年、査読有、36～43頁
- ⑫ 津野倫明、「朝鮮出兵と長宗我部氏」、『LIBERATION』、VOL. 5、2007年、査読無、19～32頁
- ⑬ 荒武達朗、「日本統治時代台湾東部への移民と送出地」、『人間社会文化研究（徳島大学総合科学部）』、第14巻、2007年、査読無、91～104頁
- ⑭ 津野倫明、「慶長の役における鍋島氏の動向」、『織豊期研究』、第8号、2006年、査読有、35～50頁
- ⑮ 吉尾寛、「台湾海流考」、『海南史学』、第44号、2006年、査読無、1～28頁
- ⑯ 荻慎一郎、「近世後期における土佐藩領の浦」、『人文科学研究（高知大学人文学部人間文化学科）』、第13号、2006年、査読無、1～25頁
- ⑰ 津野倫明、「朝鮮出兵における鍋島直茂の一時帰国について」、『人文科学研究（高知大学人文学部人間文化学科）』、第13号、2006年、査読無、27～40頁
- ⑱ 荻慎一郎、「近世土佐の浦について」、高知県立歴史民俗資料館編『描かれた土佐の浦々』、2005年、査読無、5～9頁
- ⑲ 荻慎一郎、「土佐の『浦』について」、高知大学創立50周年記念事業会編『海洋高知の可能性を探る』、2005年、査読無、126～132頁
- ⑳ 吉尾寛、「17世紀から19世紀の台湾の地方史料にみえる海流と‘黒潮’の呼称」、『海洋と生物』、27巻6号、2005年、査読無、618～626頁
- ㉑ 荻慎一郎、「黒潮圏土佐の地域性」、『海洋と生物』、27巻5号、2005年、査読無、509～514頁
- [学会発表]（計10件）
- ① 津野倫明、「南海路と長宗我部氏—元親宛書状（写）の紹介を中心に—」、戦国史研究会第362回例会報告、2009年12月12日、東京都、大正大学
- ② 吉尾寛、「海洋の環境」、世界史における東アジア海域、2009年6月18日、中華人民共和国、復旦大学
- ③ 津野倫明、「壬辰倭乱の原因・目的に関する日本の諸学説」、第39回日本学研究所国際学術大会、2009年2月6日、大韓民国、東国大学校
- ④ 岡元司・吉尾寛、「東アジア海域史をめぐる環境」、特定領域研究総括班主催研究会「東アジア海域史研究の課題と新たな視角」、2008年11月15日、広島県、国民宿舎みやじま杜の宿
- ⑤ 荻慎一郎、「近代日本の珊瑚漁と黒潮圏」、2008年度東北史学会、2008年10月5日、秋田県、秋田大学
- ⑥ 津野倫明、「土佐（高知）における史書および自治体史の編纂」、方志学理論与戦後方志編修実務国際学術研討会、2008年5月31日、台湾、国史館台湾文獻館
- ⑦ 吉尾寛、「隆慶和議をめぐる近年の日本の分析視点」、河合文化教育研究所・北京大学共催「第6回学術共同討論会—シルクロードと東西文化交流—」、2008年3月18日、中華人民共和国、石河子大学
- ⑧ 津野倫明、「慶長の役における四国衆について」、第58回地方史研究協議会大会、2007年10月28日、香川県、サンポート高松
- ⑨ 吉尾寛、「中国史料から見た〈黒潮〉の諸相」、にんぷろ海域班文理融合ワークショップ「日中交流における琉球進貢船とその周辺」、2007年9月12日、静岡県、東海大学社会教育センター三保研修館
- ⑩ 荒武達朗、「近代山東半島の満洲移民と渤海：人びとの認識する海域世界」、にんぷろワークショップ2007、2007年7月21日、福岡県、九州大学西新プラザ
- [図書]（計9件）
- ① 津野倫明編、西村膳写堂、『東アジア海域における黒潮圏交流の総合的研究 研究成果報告書』、2010年、総頁数134頁
- ② 地方史研究協議会編（共著者：津野倫明）、雄山閣、『歴史に見る四国—その内と外と—』、2008年、283～304頁
- ③ 岩崎望編（共著者：荻慎一郎）、『東海大学出版会、珊瑚の文化誌—宝石サンゴをめぐる科学・文化・歴史』、2008年、201

- ～240頁、241～300頁
- ④ 荒武達朗、汲古書院、『近代満洲の開発と移民：渤海を渡った人びと』、2008年、総頁数414頁
 - ⑤ 左近幸村編（共著者：荒武達朗）、北海道大学出版会、『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み』、2008年、211～233頁
 - ⑥ 佐藤信・藤田寛編（共著者：津野倫明）、山川出版社、『前近代の日本列島と朝鮮半島』、2007年、225～239頁
 - ⑦ 津野倫明編、西村啓堂、『「近世東アジアと黒潮圏交流」国際共同研究会報告書』、2007年、総頁数102頁
 - ⑧ 秋澤繁・荻慎一郎編、吉川弘文館、『土佐と南海道』、2006年、総頁数246頁
 - ⑨ 小島毅編（共著者：津野倫明・荻慎一郎）、勉誠出版、『義経から一豊へ』、2006年、102～114頁、116～119頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津野 倫明 (TSUNO TOMOAKI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：60335916

(2) 研究分担者

荻 慎一郎 (OGI SHINICHIRO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：60143070

吉尾 寛 (YOSHIO HIROSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：40158390

荒武 達朗 (ARATAKE TATSURO)

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：60314829

(3) 連携研究者

なし